W04-4

多彩な渡航歴をもち、肝多房性嚢胞性病変を呈した一例

前田　卓哉[1]、藤井　　毅[2]、伊賀　睦了[1]、小田原　隆[2]、赤尾　信明[3]、廣松　賢治[4]、中村　哲也[2]、岩本　愛吉[2]

1　東京大学　医科学研究所　感染症国際研究センター　　2　東京大学　医科学研究所　感染免疫内科
3　東京医科歯科大学　国際環境寄生虫病学　　4　宮崎大学　医学部　寄生中学教室

【症例】61 歳、日本人男性
【主訴】肝内腫瘤
【生活歴】1975 年から 1985 年にかけて中南米および中東に滞在歴あり。
その後2003年までは、主に九州および沖縄での国内勤務。
【現病歴】2004年1月から12月にかけてミャンマー滞在。帰国後の検診で好酸球増多および腹部エコー上肝内腫瘤を指摘され前医を受診。2004年12月の腹部造影CT にて肝S5-8に径5cmのhypovascular massを認めた。精査目的で翌2005年1月に経皮経肝的肝生検を施行されたが、病理組織学的には正常の肝実質のみが採取されたため経過観察となっていた。その後も自覚症状は認めなかったが、フォローアップの目的で2005年11月に施行された腹部造影CTでは、当初指摘された腫瘤の形態変化に加え、肝S6に新たに径4cmの多房性嚢胞性病変が出現した。1年の経過中に変動する肝内嚢胞性腫瘤の鑑別を目的に2005年11月当院に入院となった。入院時体温36.8度。 肝脾腫なく、貧血および黄疸は認めなかった。